舷門の注意

サイドパイプは個人的な船乗り要具として古く特質あるものである。パイプやフルートは古代ギリシャやローマのガリー船の奴れいに漕漕させるために使用された。

1248年の十字軍において，英国のいし弓の射手がパイプの合図によって攻撃の指示を受けたという記録がある。シェクスピアはその著 Tempest の中で「船長のパイプに注意せよ」と掲げ，Pepy はパイプの用法について航海日誌で次のように述べている。

やがてパイプは士官の象徴として用いられるようになり，或る時は名誉の象徴として用いられるようになった。

海軍大臣は鎖の首飾りについた金のパイプを用い，この金のパイプに追加して銀のパイプは士官の表徴として又は"指揮権のパイプ"として高級指揮官が使用した。笛は命令が下る度に吹くと同様高官に対しても敬礼として使用され，昔の慣習によると大概3つの別々の時に吹かれたようである。

1513年4月13日 Brest 沖で Edward 卿，海軍大臣及び Earl Surrey の息子並びに de Bidoux の間に起った事件では，海軍大臣が捕えられるとはっきりした時，彼は黄金の笛を海中投棄し，代りに後で銀の笛が彼の体内から発見されたと述べられている。名誉や名声の際に用いられる笛の重さの標準をその各部分について Henry 8 世が決めた。

ラテン語の unica から来た oon，これは元来オンスに相当するがその 12 oon に相当するようにこの独裁者は笛の重量を決めた。鎖も勿論黄金で作られ金貨9シリングに相当していた。

士官の象徴としてまた士官による用法から発展して笛は高官の招待会に使われていた。Boteler は 1645年彼の問答集の中で正しい手順を次のよう述べ，「受ける場合は，王子，将軍…… これらの人々は公式の儀式の際受けることができる……」更に加えて訪問者を送り迎えする艦載内火艇には艇尾に銀の笛を持った艇指揮を付け…… 内火艇が近づくにつれてトランペットを吹きそうして退艦の際は小銃射手より小さくなるまで吹き続けられた。トランペットが廃止された時から3回の歓迎の号笛が携帯用号笛で吹かれたと。

現代の訓練でわれわれが知っているように舷門に気を付けよということは遠い昔から始められた。帆船時代には航海中碇泊中を問わず旗艦々上で会議が開かれ，時には航海中でも天候が許せば士官は他艦の昼食に招かれるのが慣習であった。天候によっては訪問者がボースンチェアで引き上げられる時

もあったが，勿論号笛は"引き揚げ"　"引き卸し"の際に使われた。引き揚げ作業の人員は舷門に注意を怠らない狙いから，常に若干名の補助者を用意するのが習慣であった。すなわち，ある者は階級の上下，身分の上下を報告したのである。

やがて号笛は海軍の礼式となった。今日英国海軍は艦長が舷側に向って来ることが報告されると当直士官は舷梯が使われる時でも"引揚げ"の号令をかける。舷門に注意することを儀仗兵と混同してはならない。

サイドパイプは海軍の独特の礼式であって英国海軍でも重視した。しかし米国海軍はこの礼式を政府の立法行政高官に対すると同じように，陸軍，外交官及び領事等にも適用した。英国海軍では **Beckett** 司令官が準則に次のように書いている。

「陸軍士官，外交官及び他の一般文官については，この形式の礼式は適用されない。海軍将兵の遺骸は埋葬のため陸上に送られる際は礼拝の習慣により舷門において号笛が吹かれる。」

ビクトリヤ女王以来英国国王の葬儀においては，パイプを吹くこの古めかしい慣習が儀式の重要な部分になっているのは興味深い。「最高の礼拝」が英国海軍のこの方法によって，海上権力で打立てられた皇帝の主権に讃辞を送るのである。

掌帆長が吹くサイドパイプの現在の形式には昔スコットランドの海賊 **Androw Barton** を撃破し捕獲したときの伝統が残っている。

英国船 **Lion** と **Pirwin** の司令であった **Edward Howard** 卿が激戦の後 **Barton** を捕虜にし，**Barton**から笛を奪ったことが説明されている。それが原因となって **Howard** はやがて海軍大臣となった。この時期に先立って他の種類の笛も使用されていたが，官職の表徴として，適当な図案，精密な着想並びにぜいたくな模型はこの捕獲品から生れたと考えられる。

１７世紀には **Master**，**Boatswain** 及び **Coxswain** の３者が号笛を吹くことを格付けされた。**Coxswain** は艦載内火艇及び小型ボートを受持ち艦長や提督が上陸する際はいつでも準備ができ上っていた。**Coxswain** に対する命令は次のようであった。

「内火艇の敷物や座ぶとんの整備状況を点検すること，歓迎用の銀の号笛を持って内火艇々尾に彼自身が立つこと，……　そうして，内火艇内で号笛を持った士官は一番後任者であること。」